

「フルート」外伝第十六話

光を守る闇

1

ロムド城の四隅に建つ高い塔は、守りの塔と呼ばれていました。見張りの兵士や魔法軍団と呼ばれる魔法使いが交代で詰めていて、休むことなく周囲へにらみをきかせています。

その南の塔の最上階に、白い長衣を着た細身の女性がいました。淡い金髪を後ろでひとつに束ねて金の髪飾りで留め、胸にはユリスナイの象徴を下げています。女神官で魔法軍団の長の、白の魔法使いでした。すんなりしたトネリコの杖を手に、城の内外へ目を配っています。八月に入ってからずっと、王都デューラでは好天が続いています。青空の下で、城下町のオレンジ色の屋根が明るく輝いています。

そこへ、都の入口を守る魔法使いから、心話の連絡が入りました。「皇太子殿下とセシル様がエスタ国からお戻りになりました。ただいま馬車で東の大門を通過中です」「そうか」

と白の魔法使いは答えました。皇太子のオリバンと未来の皇太子妃のセシルが、隣国エスタを表敬訪問して、四週間ぶりに王都デューラに戻ってきたのです。予定通りの帰還でした。城で待つ人々にも皇太子の到着を伝えるように、と部下に指示します。

ところが、門を守る魔法使いはとまどうように言いました。

「皇太子殿下の馬車は通過したのですが、その後ろに、もう一台馬車が続いております。エスタ国の紋章が入った立派な馬車なのですが、どなたの馬車でしょう」

ああ、と白の魔法使いはうなずきました。

「それについては、先に国境の関所から連絡が入っている。皇太子殿下はエスタ国から友人をお連れになったのだ。大切な客人だから丁寧に迎えるように、と殿下からも伝言が入っている。お通ししろ」
女性なのに、男のような口調で話す白の魔法使いです。了解、と見張りの魔法使いが答えて、報告を終えます。

すると、北の塔から深緑の魔法使いが話しかけてきました。

「エスタからの大切な客とは、誰じゃろうの？ あの国に、殿下が友人と呼ぶような人物があつたじゃろうか？」

やはり心話を使っているのですが、白の魔法使いにはその姿まではつきり見るできませんでした。深緑色の長衣を着た、目つき鋭い老人で、自分の身長よりも長い櫂の杖を握っています。白の魔法使いと一緒にエスタ城を守っている、四大魔法使いの一人です。

「ノームのピラン殿ではないかな。エスタ王のお抱え鍛冶屋の。皇太子殿下がエスタ城を訪問したので、またこちらの様子を見に来たくなつたのではないだろうか」

と白の魔法使いは答えて、同じ部屋の中に設置された護具を眺めまわした。先端に丸い玉がついた金属の棒で、絶大な魔力でロムド城を守っています。この護具を強化したのが、エスタ城の鍛冶屋の長のピランでした。自分が手がけた道具をとて大切にしている人物なので、確認のためにやってくるというのは、おおいに考えられます。

ところが、短い沈黙の後、深緑の魔法使いはいぶかしそうな顔になりました。

「妙じゃな。殿下の馬車の中は見通せるのに、エスタ国の馬車の中は

「見ることができんぞ」

深緑の魔法使いは、あらゆるものの真実の姿を見極める、魔法の目を持っていきます。その強力な目で見通すことができないというのは、普通のことではありませんでした。

「またピラン殿の道具か？ 魔法の目をさえぎる道具でも開発されたのだろうか？」

と白の魔法使いが首をひねると、深緑の魔法使いは腹を立てました。「なんのためにそんなものが必要になるんじゃ！？ むしろ危険じゃろうが！」

城と都の大門を結ぶ通りの彼方に、皇太子の馬車が見え始めていました。白い馬車の後ろに、黒塗りの立派な馬車が続いています。確かに、白の魔法使いの力でも、黒い馬車の内側は見ることはできません。

「誰が乗っているのだろうか？」

魔法使いたちは密かに警戒しながら、近づいてくる馬車を見守りま

馬に乗った警備隊が続いて、二台の馬車がロムド城の正面に停まりました。ロムド国の紋章が入った白い馬車と、エスタ国の紋章が入った黒い馬車です。皇太子の帰還の知らせに、城の家臣や居合わせた貴族たちがいつせいに入口の両脇に並びます。

真っ先に白い馬車から降りてきたのは、皇太子のオリバンでした。立派な体格の青年で、誰もがほればれとするような美丈夫です。入口のポーチに下り立つと、すぐに振り向いて馬車へ手を差し出します。その手を取って降りてきたのは、オリバンの婚約者のセシルでした。長い金髪に長身の、これまた非常に美しい女性でしたが、白いシャツに青いズボンの男の恰好をしています。オリバンもそうですが、彼女も腰に剣を下げています。

けれども、出迎える人々は当然のことに、二人へお辞儀をしました。未来の皇太子妃の男装は、最初のうちこそ、頭の堅い城の人々から驚かれましたが、今では誰もがすっかり慣れっこになってしまったのです。

オリバンとセシルは、出迎えの家臣たちにつなずいてから、もう一台の馬車を振り向きましました。

「到着した。降りて良いぞ」

とオリバンが呼びかけます。あわてて家来が黒い馬車の扉を開けようとすると、それより早く内側から扉が開いて、一人の人物が降りてきました。白い服に青いマントをはおった青年で、腰にはやはり剣を下げ、長い黒髪を後ろで束ねています。青年がとても整った顔をしていたので、人々の間から感嘆の声があげられました。若い貴婦人たちが思わず胸をときめかせます。

すると、青年も馬車を振り向いて手を差し出しました。オリバン同様、連れがいたので。青年に手を取られて馬車から降りてきた若い女性に、人々は驚きのあまり絶句しました。皇太子たちや青年も美しかったのですが、こちらの女性は、この世のものとも思えないほど美しい容姿をしていたのです。青年の服と同じ色のドレスを着て、青い帯を締めています。流れるような黒髪と、伏し目がちで遠慮深そうな様子が、彼女の美しさをいっそう際立たせています。

続けて、馬車の中から三つの生き物が飛び出してきました。黒い羽根の鷹たかが一羽と、どこからどこまでそっくりな赤毛の小猿が二匹です。鷹は青年の肩に舞い下り、小猿はちよるちよる走って女性のドレスの裾につかまります。

出迎えに出ていた宰相のリーンスが、オリバンへ言いました。

「お帰りなさいませ、殿下。こちらがエスタからのお客さまでございますか。どちらの方々でございましょうか？」

いつも落ちつきはらっている宰相ですが、さすがにこの客人たちには驚きを隠せずにいました。その後ろの人々に至っては、ざわめきながら、身を乗り出して注目しています。皇太子がこの場にいなければ、我先に殺到して客を取り囲んでいたかもしれません。

オリバンが答えました。

「こちらはエスタ国の王妃の遠縁に当たる方たちだ。ランダトルクの貴族だが、エスタ城で偶然一緒になって意気投合したので、我が国に招待した。当分、城に滞在してもらおう予定だ」

居並ぶ人々がまたどよめきました。客がロムド城に長期滞在するとわかって喜んだのです。青年が笑顔でそちらへ一礼すると、女性たちがいつせいに黄色い声を上げます。

ところが、宰相が客に挨拶しようとする、その前にいきなり老人が現れました。手にした杖でどん、と地面を突いてどなりまします。

「おまえたちを城に入れるわけにはいかん！！下がれ！！」

深緑の魔法使いでした。白い眉の下から射抜くような目で二人の客をにらみつけています。その激しさに人々は仰天しました。魔法使いは、敵に対する態度で客に接しています。

すると、次の瞬間には白い長衣を着た女性が現れました。白の魔法使いです。深緑の魔法使いと客の間に割って入るように立って言います。

「待てと言っているのだ、深緑！話を聞け！」

「いいや、聞けんぞ、白！術にでもかかっとなるのか！？ここにいるこの連中は――！」

「深緑！！」

今度は白の魔法使いが自分の杖で地面を突きました。とたんに、白の魔法使いも深緑の魔法使いも、オリバンもセルも、二人の客人も、鷹や小猿も、かき消すように姿が見えなくなります。

人々がいつそう驚いて混乱していると、入れ替わりのように青い長衣の大男が現れました。武僧の証であるカイタ神の象徴を下げ、こぶだらけのクルミの杖を握った、青の魔法使いでした。リーンズ宰相と人々に頭を下げて言います。

「これはこれは、大変失礼をいたしました。実は、あの美しい客人方をこのままお通ししては城中が大騒ぎになる、と深緑が心配しました。少々手荒でしたが、魔法で一足飛びにご案内したのです。皆様方を驚かせて、まこと申し訳ありませんでした」

青の魔法使いの説明に、人々は、本当にそういうことだったのだらうか？と首をかしげました。どうも、そんな友好的な状況には見えなかつたのですが、見上げるような魔法使いが平然と言いつているので、誰も反論できません。ただ、リーンズ宰相だけが、意味ありげに青の魔法使いを見て言いました。

「宰相の私がお客さまに後れを取ってはなりません。私も送っていただましようか、青の魔法使い殿」

五十年近くも王に仕えてきた老宰相は、エスタからの客人たちに何かあると、すぐに確信したのです。

青の魔法使いがうなずいて杖を振ると、宰相と魔法使いの姿も消え、後には意味がわからなくてとまどう人々だけが残されました。

2

白の魔法使いが客人や皇太子たちを移した場所は、ロムド国王の執務室でした。王は、護衛の兵に守られながら、一人で机に

向かっていたましたが、そこにいきなり数人の男女が現れた

ので、驚いて立ち上がりました。

深緑の魔法使いは王の机の前に立つと、杖をかざしてどなりました。「何故こんな場所へ来たんじゃ、白!? その連中の正体は見えておるはずじゃぞ! 闇のものに陛下を襲わせるつもりか!？」

長い櫂の杖が、客人の青年と女性へ魔法を撃ち出しました。青年の肩で鷹が羽ばたき、二匹の小猿が悲鳴を上げて女性のドレスにしがみつきます。

ところが、白の魔法使いの魔法がそれを跳ね返しました。深緑の光と白い光が、砕けて火の粉のように飛び散ります。

「待てと言っているのだ、深緑! 落ちていて話を聞かないか! 陛下の御前なのだぞ!」

と白の魔法使いが叱ったので、深緑の魔法使いはいつそう逆上しました。

「何を馬鹿なことを言っている! 見んか! これがいつらの正体じゃぞ!」

老人が鋭く光る目で見据えたとたん、客人たちの姿が変わっていききました。美しい青年と女性の頭に角が現れ、指の爪が伸び、瞳は血の色に変わります。白かった服も黒一色になり、さらに、青年の背中には黒い翼までが現れます。

「ままま、まづいゾ!」
「ままま、魔法が解けちゃつヨ!」

と二匹の小猿がいきなり人間のことばを話し出しました。いつの間にか、猿から小さな怪物に変わっています。目玉の大きなゴブリンです。黒い鷹も、ふくれあがるように大きくなって、怪物に変わってしまいました。こちらは体の前半分がワシ、後ろ半分がライオンの、黒いグリフィンです。あつという間に、王の執務室がグリフィンでいっぱいになってしまいます。

「見たか! こいつらは闇の民と闇の怪物どもじゃ! 闇のものを城

に引き入れるとは言語道断! さつさと消滅させるんじゃ!」

深緑の魔法使いがまた杖を振り上げました。闇の青年が女性と怪物をかばうように手を広げ、白の魔法使いは防御魔法を繰り出しました。深緑と白の魔法がまた激突して、光の火の粉を散らします。

すると、そこへ青い長衣の大男が現れました。リーンス宰相も一緒にです。

「まあ、待ちなさい、深緑。彼らならば大丈夫なんですよ!」

と青の魔法使いが言って、深緑の魔法使いを後ろから捕まえました。太い腕に杖ごと抱え込まれて、老人はじたばたしました。放せ、青、放さんか! とわめきますが、抜け出すことはできません。

「まったく……。さつきから落ち着けと言っているのに。王の執務室で魔法合戦など、とんでもない失態だぞ!」

と白い女神官は頭痛でもするように頭を抑え、急いでロムド王と皇太子へひざまずきました。

「深緑が早合点をして、大変申し訳ございませんでした、陛下、殿下。この失態は長である私の責任です。いかなるお叱りもお引き受けいたしますので、なにとぞ深緑にはおとがめございませんように……。深緑は、彼らを知らなかったのです!」

ロムド王は、いきなりの事態に驚いていましたが、白の魔法使いのことばを聞くと、苦笑いしながら皇太子を見ました。

「そなたが連れてきた客人は、思いも寄らぬ者たちだったようだな、オリバン。察するに、彼らは金の石の勇者殿の友人たちであろう。闇のグリフィンがいると聞いたことがある。これほど重要なことをあらかじめ連絡しておかなかった、そなたの落ち度だぞ!」

父王に叱られて、皇太子は大きな体を小さくして詫言いました。セシルがそれを弁護します。

「陛下、オリバンは彼らの正体が万が一にも外部に洩れることがあつ

てはならないと、ここに来るまでずっと彼らのことを極秘にしてきたのです。エスタ国王も、彼らの秘密を守るために、魔法の馬車を貸してくださっていました」

「勇者殿の友人じゃと？」

と深緑の魔法使いは驚いて抵抗をやめました。青の魔法使いは腕を緩めると、肩をすくめました。

「話して聞かせたでしょう。その若者がキースなんですよ。我々が神の都ミコンで出会ったときには、人間に化けて、聖騎士団の一員になっていましたがね。勇者殿たちだけでなく、白や私のこともずいぶん助けられました」

「そちらにいるのはアリアンとグリーだ。これも勇者殿たちからずいぶん話に聞かされていた。本当に、思いがけない客人たちだ」

と白の魔法使いも言つと、闇の青年は照れたように頬をかきました。「お久しぶり……。こんな恐ろしい姿を見せてしまって、お恥ずかしい限りです。できるだけミコンの時に近い恰好で再会しようと思っただけなんです」

「それは深緑のしたことだ。あなたが気にすることはない。また逢えて、私も青も本当に嬉しい」

と女神官が答えると、青年たちの姿がまた元に戻りました。青年は白い服に青いマントの聖騎士団の恰好に、女性は白いドレスの人間の娘に、二匹のゴブリンは赤毛の小猿に、グリフィンは黒い鷹に変わって宙に舞い上がります。真実を見抜く老人の魔法が切れたのです。

その時、執務室にもう一人の人物が現れました。つややかな黒い肌と縮れた黒髪に、猫のような瞳をした、赤い長衣の小男です。ロムド王を守って立っている警備兵へ、細いハシバミの杖を向けて呪文を唱えます。

「レロ」

とたんに、武器を手にも構えていた兵士たちが武器を収め、生真面目な表情になって王へ敬礼しました。

「承知いたしました、陛下。我々は部屋の外で見張っております」

と一列になって執務室から出て行ってしまいます。人間の姿に戻った青年たちには、もう目も向けません。

驚いている青年たちに、白の魔法使いが言いました。

「兵士たちに、あなたたちの正体を忘れる魔法をかけたのだ……。今到着したのは赤の魔法使い。これで、ロムド城の四大魔法使いが全員揃った」

「いや、今いる重臣全員がここに揃っております」

とリーンス宰相が口をはさみました。客人が闇の民の姿になったり、また人間に戻ったりしたことに、内心は驚いていたのかもしれませんが、まったく顔には出しません。

「重臣が全員？ ウルラ將軍は南部の視察中だが、ユギルやゴーラントス卿はどうしたのだ。私たちがエスタから戻るより先に、フルートの故郷のシルから帰っているはずだではないか」

とオリバンが聞き返すと、青の魔法使いが答えました。

「ゴーラントス卿の令嬢が長旅の疲れで熱を出されたので、占者殿たちはまだシルに足止めされているのです。占者殿がいらっしゃらないので、我々もいつも以上に神経質になっていたようですね」

とさりげなく仲間の老人を弁護します。

ロムド王が笑いました。

「良い。四大魔法使いがいつも職務に忠実でいるおかげで、この城と国は安泰であるのだからな。この場にはいない者もあるが、とりあえず、自己紹介といこう。わしが、この国の王のロムド十四世だ。いきさつはまだわからぬが、オリバンが友人として連れ帰ったのであれば、貴殿たちは我が城の客人だ。自分の家のようにくつろげるように」

急伸中の大国の王でありながら、ざっくばらんな親しさでそう言います。

闇の青年は目を丸くすると、もう一人の青年へ言いました。

「君の言っていた通りだな、オリバン……。国王陛下はぼくたちを気にせず受け入れてくれるだろう、と聞かされても、正直半信半疑でいたんだ。人間や動物の姿でいれば、なんとかなるだろうか、と考えていたんだけど、闇の姿をもろに見せても、それでも信じていただけなんてね。さすがはフルートが仕える王だ」

すると、オリバンは大真面目で答えました。

「父上はフルートの主君ではない。金の石の勇者は誰の家来でもないのだからな。フルートが初めてこの城へやってきたとき、あいつはただだった十一才だった。荒野の田舎町から出てきた子どもを、父上は金の石の勇者と信用して送り出したのだ。父上の懐の広さには、誰もが感心する」

「私もロムドと戦った敵国の王女だったのに、こうして未来の皇太子妃としてロムド城に受け入れてもらっている」

とセシルも言います。

ロムド王はまた声を上げて笑いました。

「はてさて、息子たちにはめられるというのは、父親として、なんとも面映ゆい気持ちがあるものだな……。さて、こんなところで立ち話もなんだ。隣の部屋に移動して、ゆっくり客人たちの話を聞かせてもらおうか」

王の呼びかけで、全員は執務室の隣室へ移動しました。丸いテーブルと椅子があり、いつでも茶が飲めるように支度がされています。

赤毛の猿に変身しているゾとヨが、頭を寄せ合って言いました。

「この王様も、フルートたちと同じ感じがするゾ。すごく暖かいゾ」

「頼りになる感じもするヨ。この王様もオレたちのトモダチなのかヨ？」

すぐ前を歩いていたキースが、あわててたしなめました。

「こら、ゾ、ヨ。陛下に失礼なことを言うんじゃない」

すると、話を聞きつけたロムド王が言いました。

「それはそなたたち次第だな、ゴプリンたち。わしはロムドの王だから、ロムドの国と民に害をなす者は許さんが、ロムドを助けてくれる者は大歓迎する。そなたたちがロムドの友となるかどうかは、そなたたち自身の行動が決めることだ」

とたんに、二匹の小猿は、くりつと大きな目を回しました。

「やっぱりフルートたちと同じことを言うゾ！ だから、オレたち、闇の国を飛び出してきたんだゾ！」

「オレたち、ロムドの王様の役に立つヨ！ そして、絶対に王様のトモダチになるヨ！」

口々に言つて、その場で宙返りします。

「それは頼もしい。勇者殿たちは、またすばらしい友を見つけてきてくれたのかもしれない」

とロムド王は穏やかに笑いました。

3

闇の客人がロムド城に到着して二日後、武僧の青の魔法使いは、城の中の彼らの部屋を訪ねました。

城の静かな片隅にロムド王が準備した部屋は、広く立派で、プライベートな居間を挟むようにして、キースとアリアンの部屋があります。

今は、アリアンとグリーだけが居間にいて、壁の鏡をのぞき込んでいました。アリアンは若草色のドレスの人間の姿、グリーも黒い羽根の鷹に化けています。

「お邪魔しますよ」

と青の魔法使いが言うと、アリアンはうなずいて魔法使いを椅子に案内しました。鷹に化したグリーが、向かいの椅子の背に停まり、アリアンも同じ椅子に座ります。

「どうですか？ 何か困ったことなどありませんか？ 白があなた方を心配して、様子を見に私をよこしたのですが」

と青の魔法使いが尋ねると、アリアンは首を振りしました。

「ありません……。お城の方々には、とても良くしていただいています」

闇の少女だというのに、アリアンの口調はとても控えめです。

「来客が多くて迷惑だということは？ 城の貴族たちは、あなた方に興味津々でしたからな」

「それも……。陛下やオリバン殿下がご配慮くださって、この部屋には人を近づけないようにしてくださいますから」

「それは良かった」

青の魔法使いはほっとすると、改めて部屋の中を見回しました。

「キースは出かけているのですか？ ソとヨも見当たらないようだ」

すると、アリアンはちょっとほえみしました。

「キースは貴族のお嬢さんと散歩に出かけています。ソとヨはお城の中を探検しているようです」

やや、と青の魔法使いは声を上げました。

「キースはデートですか？ あなたという女性がいるというのに。いけませんな。言っただけで聞かせましょ」

すると、アリアンは微笑したまま首を振りしました。

「私はキースの恋人ではありませんから……。闇の親衛隊に捕まった

ところを助けてもらって、いきがかりでここまで一緒にいるだけです。このお城では、私はキースの妹ということになっています」

「妹ですか？ それはまずいでしょう」

と青の魔法使いは心配しましたが、少女はほほえんだまま、何も言いませんでした。まるで、それでいいんです、と言うような態度ですが、笑顔はどこか淋しげです。

ふむ、と武僧の魔法使いは太い腕を組みました。少し考えてから、話題を変えます。

「この城には、中央大陸随一の占者のユギル殿がいらっしゃるのですが、勇者殿の故郷を訪問中で、かれこれ一カ月も不在です。占者殿がいないと、いろいろと知りたいことがわからなくて不便ですね。例えば、勇者殿たちは、今どこでどうしているのだろう、とか……。あなたは大変優れた千里眼をお持ちだと聞いています。それで勇者殿たちの様子を知ることができませんかな？」

神の都の戦いでフルートたちと同行して以来、青の魔法使いと白の魔法使いは、勇者の一行をいつも気にかけていました。アリアンならば彼らのことがわかるかもしれない、と思いついて、様子見がてら聞きに来たのでした。

アリアンはうなずいて、壁にかかった鏡を示しました。

「それならば、ずっと眺めています。フルートたちが闇の国へ引き返して行つてから、ずっと……。彼らは闇王の魔法で地上へ送り返されたら、白い石の丘と呼ばれる場所だとわかりました。聖なる力で守られているので、私には中の様子はわかりませんが、そこならば絶対に安心だ、とオリバン殿下がおっしゃっていました」

「白い石の丘ですか！ 賢者のエルフが住む」

と青の魔法使いは驚きました。フルートたちが意外なほど近い場所

へ戻っていたことにも驚きますが、すぐに苦笑しました。

「あそこは、賢者に招かれた者しか入れない聖域です。勇者殿たちは行くことができますが、我々にはたどり着けない、近くて遠い場所だ。だが、その場所ならば、確かに勇者殿たちも安全でしょう。」

いかつい顔が、苦笑から本当の笑顔に変わりました。フルートたちの無事を知って安心したのです。

そんな青の魔法使いを少しの間見つめてから、アリアンが言いました。

「あの……よろしければ、お城や王都の周辺も見て差しあげましょうか……？ 一番占者様がお戻りになるまでの間、この国に悪さをする敵がいなかどうか、見張れますが。」

「いや、と青の魔法使いはまた声を上げました。

「見張ると言っても、ロムド国は広大ですぞ！ そんなことができるのですかな？」

「一度に全方向は無理ですが、特に気になる方角があれば、そちらを探ることはできます。敵の姿や様子が予想できるのであれば、それを探すこともできます。」

「武僧の魔法使いは感心して、ふうむ、とうなりました。

「白と、国王陛下に相談してみましよう。ユギル殿の留守が長くなつて、守備に弱さが出始めたところです。その申し出は、我々にとって非常にありがたい。」

率直なことばで感謝をされて、アリアンはまたほほえみました。今度は心底嬉しそうな笑顔が広がります。

それを見て武僧はうなずき、よろしく頼みますぞ、とアリアンの肩をたたきました。

その頃、中庭に面したバルコニーでは、キースが着飾った貴族の令嬢と甘い会話の真つ最中でした。

「あそこに美しいあなたが通りかかってくださって本当に助かりました。連れにはぐれてしまったので、あのままでは城内で迷子になって、戻れなくなるところでした。」

ちなみに、今キースと一緒にいるのは、先ほどアリアンが青の魔法使いに話していたのとは、また別の令嬢です。先の女性とのデートをさつさとすませて、また別の女性に声をかけていたのでした。

「あら、そんな大層なことをしたわけじゃございませんわ、キース様。このお城はとても広くて、来たばかりの方がまごつくのは当然ですもの。」

と令嬢が答えました。その瞳は、端正なキースの顔をうつとりと見つめたままです。そんな彼女に、キースはいっそう美しく笑って見せました。

「いいえ、本当に助かりました。戻り道が見つからなくて心細くなっていたところへ、あなたが声をかけてくれた。ぼくには、あなたが天から遣わされた天使のように見えましたよ。」

まったく歯の浮くような台詞なのですが、キースが言うと、何故だかそれが様になってしまいます。令嬢は、まあそんな、と嬉しそうに頬を染めました。

そんな彼女の手を取って、キースは誘いました。

「どこか静かな場所に行きたいですね。ここは人が通りかかるから、どうも落ち着かない。二人きりになれるような場所がありますか？」

「ええ、ええ、ありますけど、でも。」

真つ赤になつて恥じらいながら、それでも期待するように目を輝かせる令嬢に、どこ？ とキースはまたほほえみかけました。

「こちらですわ。いらして。」

令嬢が上気した顔のままキースの手を引いて歩き出します。

とたんに、がしゃーんという、すさまじい音が響き渡りました。大きな物が砕けた音です。キースと令嬢は飛び上がって驚き、同じ階にいた人々も仰天して駆けつけてきました。

バルコニーのすぐ近くのホールで、天井から下がったシャンデリアのひとつが、床の上で粉々になっていました。飛び散った蝋燭が絨毯を焦がしているので、水だ！ 消防隊を呼べ！ と人々が騒ぎ出します。

その中を赤い小さな影が駆け抜けていくのを見て、キースはまた驚きました。二匹の生き物が逃げるようにホールから飛び出していったのです。

キースはあわてて令嬢に言いました。

「申し訳ない、急用を思い出してしまったんだ。後で必ず連絡を差し上げますから、今はこれで！」

「キ、キース様……!?!」

あっけにとられる令嬢をその場に残して、キースは駆け出しました。ホールから走り去った生き物を追いかけて、まもなく通路の隅で追いつきます。案の定、それは小猿になったゾとヨでした。通路の行き止まりに突き当たって、キイキイ飛び跳ねています。

キースはどなりました。

「こら、おまえたち！ いったい何をしたんだ!?!」

ゾとヨは縮み上がり、壁に背を押し当てるキースを振り向きまじまじと見ました。「オオオ、オレたち何もしてないゾ！ 悪さするつもりなんて、なかったんだゾ！」

「そそそ、そうだヨ！ ただ、蝋燭が一本消えてたから、火をつけ直すとして登っただけだったんだヨ！」

キースは思わず頭を抱えました。

「二匹でシャンデリアの上に登ったのか？ 落ちるに決まってるじゃないか！ そんなのは、城の蝋燭係がやるから、放っておいていいんだよ！」

もうちよつとで令嬢を口説き落とせるところを邪魔されたので、キースは腹を立てていました。ゾとヨに対する口調がきつくなっています。二匹の小猿はいっそう縮み上がると、めそめそ泣き出しました。

「オ、オレたち、城の役に立ちたかったんだゾ！」

「そうだヨ。ロムドの王様のトモダチになりましたよ！」

キースは絶句しました。それ以上怒ることができなくなつて、猿に化けたゴブリンたちを見つめます。二匹は頼りなく震えながら泣きべそをかいています。

キースは二匹にかがみ込むと、頭をなでてやりました。

「役に立ちたいのなら、他のことをするんだ。もうシャンデリアには登るなよ。危ないから！」

言いながら、ふと、自分は何かこの人々の役に立てるんだろうかと考えてしまったキースでした……。

4

それからまた数日後、白の魔法使いが守る南の塔に、青の魔法使いが現れて言いました。

「妙な報告が入ってきましたぞ、白。東の街道のレコル付近で、大きな怪物が目撃されたらしいのですが。」

「東の街道で？ 黒い闇の霧がロムドをおおった時をのぞけば、あのあたりに怪物が出現したことはなかったはずだぞ。」

と白の魔法使いが驚くと、青の魔法使いは意味ありげにうなずきました。

「しかも、レコルに派遣されている私の部下が、そんな怪物は気配も感じなかったと言っているのです。決して魔力の弱い者ではない。どうも奇妙に思えますな」

女神官の魔法使いは、指を唇に当てて考え込みました。

「確かに妙だな……。どんな怪物だ？ 誰が見かけた」

「大きな醜い牛のようだったと。レコルの住人が四、五人見えています」

女神官はたちまち眉をひそめました。

「闇の怪物か？ あんな場所に？ 東の街道はロムドとエスタを結ぶ交通の要所だ。一刻も早く確認して対処しなくてはならないぞ」

「ユギル殿はゴーラントス卿の家族とシルを出発されたが、城に戻るにはまだ数日かかります。アリアンに透視してもらうのが良いのではないかと思うのですが」

武僧の提案に、女神官はうなずきました。

「深緑を呼んで、一緒に確認させよう。赤、我々はしばらく塔の守りから抜ける。後を頼むぞ」

「カイ、セロ」

と西の塔から赤の魔法使いの了解が聞こえてきました。白と青の二人の魔法使いは、空間を飛び越えて、アリアンの部屋へ向かいました。

「こりゃあ、牛鬼ぎゅうおにじゃな。海や川に現れる闇の怪物じゃ。東の街道に出てくるようなヤツじゃありませんぞ」

アリアンの鏡に映った怪物を見たとき、深緑の魔法使いがそう言いました。丸い大きな鏡の中では、牛の怪物がうごめいていました。

頭は牛ですが、体は巨大な蜘蛛の形をしています。

アリアンが言いました。

「誰かがこの怪物に気配を消す闇魔法をかけています。聖なる目に見えなかったのは、そのせいです。私は闇の民なので見ることができませんが……」

「闇魔法か。では、このあたりに、こいつを送り込んだ魔法使いがいるということだな。見つけられるか？」

と白の魔法使いが尋ねると、アリアンは答えました。

「時間がかかるかもしれませんが……探してみます」

アリアンが真剣に見つめ始めた鏡の中で、景色がめまぐるしく変わり始めます。

青の魔法使いが白の魔法使いに言いました。

「私が現場に向かいますよ。どうも、こいつには嫌な予感がある。

被害が出ないうちに、早く退治した方が良さそうだ」

「そうじゃな。牛鬼ぎゅうおには人を食う怪物じゃ。しかも人に化けると言われる。わしも同行したほうが良いじゃろっ」

と深緑の魔法使いも言います。

白の魔法使いは少し考えてからうなずきました。

「よし、ではレコルに飛べ、青、深緑。アリアンが牛鬼ぎゅうおにを操る敵を見つけたら、すぐに心話で伝える」

「了解」

「承知じゃ」

と言って、二人の魔法使いが消えていきました。後には女性二人が残ります。

鏡で敵を探し続けるアリアンへ、白の魔法使いは言いました。

「あなたがロムド城に来てくれて良かった。ユギル殿が不在でも、敵に遅れをとらずにすみそうだ」

けれども、アリアンは返事をしませんでした。鏡で透視をするのに夢中で、話が耳に入っていないのです。椅子の背に停まった鷹のグー

リーだけが、ちょっと首をかしげます。

女神官は微笑して言いました。

「私はまた南の塔へ戻る。彼女をしつかり守れよ」

キアア、と鷹のグリーリーは返事をしました……。

同じ頃、キースは城一角にある厨房の裏口で、中年の女性を相手におしゃべりをしていました。そこは城にいくつもある厨房のひとつで、城の牢獄にいる囚人へ出す食事を作るための、特別な場所でした。女性はそのまかない、つまり調理人です。

「へえ、じゃあ、この城にはあまり囚人はいないんだ。それでこんな小さな厨房でも大丈夫なんだね。とはいえ、おばさんたちは大変だろうね。朝は早いんだらう？」

とキースが人なつこく尋ねると、まかないの女性は機嫌よく答えました。

「早いねえ。毎朝四時には竈かまどに火を入れるよ。そうしないと、朝食の時間に間に合わないからね。でも、もっと大変なのは、囚人の体調に合わせた食事を作らなくちゃいけないことさ。年寄りも病気持ちもいるから、医者が、食べさせていいもの、悪い物を教えてくれるんだよ。」

こんなに囚人に親切な牢獄は他にはないだろう、って言われてるよ。女は、大変だと言いながらも、その仕事に誇らしそうな顔をしています。

「本当だ、すごいね」

とキースは答えました。ロムド城の公正さに、本気で感心してしまいます。

キースは一昨日から話をする相手を変えていました。美しい貴族の娘たちではなく、城で働く侍女や掃除婦、まかないなどを捕まえては、

雑談していたのです。ゾとヨに触発されて、自分も城の役に立たなくてはいけないような気がしたのですが、何をすれば良いのかわからないので、とりあえず城の様子を聞いて回っているのです。

容姿は美しいのですが、同時に何とも言えない愛嬌があるキースなので、女性たちは年齢に関係なく、キースに親切に答えてくれました。今話しているまかないの女性も、キースにこんなことを言ってきました。「あんたは本当にいい男だねえ。それに、今時珍しいくらい素直な若者じゃないか。どうだい。あたしには二十六になる娘がいるんだ。ちよつと年上かもしれないけど、あんた、娘と結婚して、うちの婿にならないかい？」

キースは笑顔を浮かべると、やんわりそれを断りました。

「そんなにぼくを気に入ってもらえて嬉しいな。でも、悪いけれど、ぼくにはもう好きな娘がいるんだよ。ぼくの片思いなんだけどさ。おばさんの娘さんにはよろしく言っておいてよ」

「あれまあ。こんな美男子に片思いさせるだなんて、どんなお嬢さんなんだらうねえ？ がんばらなくちゃダメだよ、あんた。男なら、どんと当たって砕けるくらいの気迫で行かなきゃ」

「いや、砕けちゃまずいから、こうして片思いでいるわけです……」

キースはそつなく雑談を続けていきます。

そこへ、厨房の裏口から別のまかないの女性が出ました。

「ちよつと、ライラ、牢から昼の食器が返ってきたよ。洗いものに戻るときだよ」

「ごめんごめん。今行くよ」

ライラと呼ばれた女性は笑って答え、急に何かを思い出す顔になって尋ねました。

「そーいや、あの囚人の食器はどうだった？ 残してたかい？」

仲間のまかないは首を振りました。

「綺麗に平らげてたよ。どういうことだろうね？ あれだけ贅沢ばかり抜かして、食事を残していたヤツがさ。あの牢の中では魔法は使えないはずなのに」

「とうとう根負けしたかねえ？ 魔法使いだって、腹は減るだろうからね」

「そんな殊勝なヤツかい。四ヶ月も食事ごとに文句ばかり言ってたのにさ。どこかに食事を捨ててるんじゃないかと、あたしはにらんでるよ」

「なんでそんなことしなくちゃいけないのさ。必要ないだろう。二人のまかないの話に、キースは口をはさみませんでした。」

「ごめん、おばさんたち。それって誰の話なの？」

「サータマンの魔法使いさ。サータマン軍がディーラに攻めてきたときに、四大魔法使いに敗れて捕まったんだけれどね、これがえらくわがままなヤツで、肉はクアロー産の牛の最上級品でなくちゃダメだとか、ワインはエステの何とか地方の何年物をよこせとか、そんなのばかりでさ。食事のたびに当てつけがましく料理を残していたんだけれど、ここ三日ばかり、急に残さなくなっただんで、どういうことだろう、ってみんなで不思議がってるんだよ」

とライラが教えてくれます。

へえ？ とキースも首をひねりました。まかないたちが厨房に戻り始めたので、礼を言っただけで裏口を離れます。

ロムド城の上には夏の空が広がっていました。雲は多いのですが、その間からのぞく空が青く輝いています。日差しが適当にさえぎられるので、むしろ爽やかに感じられる日です。

さて、次はどこに話を聞きに行こうか、とキースが考えていると、背後で人の気配がしました。さっと裏庭を横切っただけで、振り向いたときにはもう姿が見えませぬ。

キースはたちまち緊張して身構えました。剣を抜いて、素早く周囲へ目を配ります。誰かが裏庭に潜んで、こちらの様子をつかっているのです……。

すると、突然木立の陰からキースめがけて何か飛んできました。細いナイフです。キースは剣でナイフをたたき落として木へ走りまわりました。

「誰だ!？」

と木陰に飛び込みますが、そこには誰もいませんでした。驚いて立ち止まってしまいます。

そこへ、木の上から背後に人が降ってきました。剣を持ったキースの手を強く後ろへ引き、もう一方の手に握ったナイフをキースの咽喉に突きつけます。

身動きできなくなったキースは、後ろへ目をやって、また驚きました。彼を捕まえてナイフを突きつけていたのは、赤と青の派手な服を着て、顔に奇妙な化粧をした、背の高い道化だったのです。

5

背の高い道化に後ろからいきなり襲われ、ナイフを突きつけられて、

キースは叫びました。

「誰だ!？ 何を……!？」

ナイフはキースの咽喉に横一文字に押し当てられていました。キースが少しでもおかしい動きをすれば、研ぎ澄まされた刃が咽喉を切り裂きます。

すると、道化が低い声で答えました。

「それはこちらの台詞だ。おまえは何者だ。なんのために城内を探っている？」

明らかに城を警護する者のことばです。キースはあわてて言いました。

「ぼくはロムド王と皇太子の客人だ！ 怪しい者じゃない！」

とたんに、道化の声がいつそう敵しくなりました。

「怪しい者じゃない!? 闇の民が怪しくないと言っのか！ おまえの本当の目的を白状しろ！」

相手が自分の正体を知っていたので、キースは驚き、すぐに気がつきました。

「そうか……君もロムド王の重臣の一人なんだな。信じてくれ、ぼくは本当に敵なんかじゃない。ただ、この城のことを早く知りたいと思って、あちこちで話を聞いていただけなんだ」

道化は返事をしませんでした。ナイフは相変わらずキースの咽に突きつけられたままです。刃が今にも咽に食い込みそうで、キースは焦って言い続けました。

「本当だよ！ 陛下やオリバンに聞いてくれ！ このナイフをどけてくれよ！」

すると、道化がまた口を開きました。

「闇の民は不死身のはずだ。どうしてナイフを恐れる」

キースはうんざりしたように顔を歪めました。

「あいにくと、ぼくは闇の民と人間の両方の血を引いていてね……。純粋な闇の民ほど回復力はないんだ。切られたら君たちと同じように死んでしまうんだから、危険な真似はやめてくれないかな」

相手はまた黙りました。道化のくせに、妙に口数が少ない男です。と、その膝がふいに上がって、剣を握るキースの右手を強く蹴りまし

た。キースが思わず剣を取り落とすと、その隙にナイフを引いて安全な距離まで飛び下がります。

「ひどいな」

とキースはしびれる手をさすり、剣を拾い上げて鞘に収めました。それを見て、道化が尋ねてきます。

「何故魔法で反撃せん。やはり半分人間だから魔法が使えないのか？」

「ロムド王の忠臣を攻撃するわけにはいかないだろう」

とキースは両手を広げて見せると、改めて道化に尋ねました。

「君は誰だ？ 見たところ、ただの道化じゃないよね。覆面警察って奴かい？」

道化は答えません。

キースは溜息をつきました。

「まあね。誰もがロムド王やオリバンやフルートたちのように、ぼくらを信用してくれるとは思っていなかったさ。とにかく、ぼくは君たちの敵じゃ」

とたんに道化は顔つきを変えました。いえ、厚化粧をしているので、表情はよくわかりませんが、確かに驚いたように身じろぎをしたので、す。

「おまえはフルートを知っているのか？」

と聞かれて、今度はキースが驚きます。

「そう言うからには、君も彼らを知ってるんだな？ ぼくはフルートたちの友だちだ。彼らに闇の国から助け出されてきたんだよ」

たちまち道化は警戒を解きました。ずっと握っていたナイフを収めて、瘦せた肩をすくめます。

「悪かったな。フルートたちの友だちだと言うなら、確かにおまえは信用できそうだ。俺はトウガリ。道化をしながら王妃様たちを守っている間者だ」

ぶつきらばうなもの言いでしたが、今までよりずっと親しみのある調子でそう名乗ります。

「信用してもらえて嬉しいよ……。フルートたちに感謝しなくちゃな」とキースは、ちょっと笑いました。離れてしまった今も、彼らに助けられている自分を感じます。

「それで？ 厨房のまかないから何か面白い話は聞けたか？」
とトウガリがキースに尋ねました。

「いや、特には」
と言いかけて、キースはまかないたちが最後に言っていたことを思い出しました。

「そういえば、牢にいるサータマンの魔法使いが最近食事を残さなくなった、と不思議がっていたな。今までは食事に文句ばかりつけて残していたのに、ってね。こんな話でも参考になるかい？」

「サータマンの魔法使いというと、イール・ダリか。王都防衛戦の時に闇の杖を使って攻めてきて、あの白の魔法使いを殺そうになった男だ。サータマンとの戦後交渉が難航しているので、城に留め置かれているんだが、牢の中でもわがまま放題を言っている。そいつが食事を残さなくなったって？ 確かに妙だな」

トウガリはしばらく考え込み、やがてキースに手招きしました。

「一緒に来い。俺はこの恰好だからな。牢番の気を引いてやるから、その隙に中に入り込んで、牢を確かめてくれ」

「問者の助手をしろと言っわけかい？」

「嫌なら頼まん。少し手間はかかるが、俺一人で確かめる」

「冗談だよ。手伝うさ……。いや、手伝わせてください、だな。どうも、ただ客でいるのは肩身が狭くてね。ぼくにできることがあるなら、やらせてくれ」

それを聞いて、トウガリは道化の顔でにやりとしました。無言で頭

を動かして、来い、と伝えます。

キースはトウガリの後に従って、城の牢へと向かっていきました。

ゴブリンのゾとヨは、赤毛の猿に化けて、ロムド城の探検を続けていました。相変わらず、何かロムド王の役に立てることはないかと探していたのですが、小さな彼らにできそうなことはなかなか見つかりません。それでも、あきらめることなく城内を飛び回ります。通りかかった人が彼らを見て驚くことはありましたが、なでたり餌をくれたりする人も多いので、ゾとヨはこの猿の恰好がかなり気に入っていました。

二匹が長い廊下を壁の燭台伝いに飛び渡っていると、廊下を人が通っていききました。頭上にいるゾとヨには気がつかなかったのでしょうか。目も向けずに、足早に通り過ぎていきます。それを見送っていたゾが、おや、というように首をかしげました。

「今の人間、匂ったゾ」

「うん、匂った。闇の匂いだったヨ」

とヨも答えます。

この城に来てから、闇の匂いをかいだことはありませんでした。自分たちも、キースの魔法で猿にしてもらっているので、闇の匂いはさせていません。今のは誰なんだろう、と見つめていると、その姿が廊下の途中で急に消えました。どこにも見えなくなりません。

ゾとヨは顔を燭台にしがみついたまま、顔を見合わせました。

「……ロムド王に知らせたほうがいい気がするゾ」

「うん、オレもそう思うヨ。行こう」

二匹は廊下に飛び下りると、王の執務室目ざして大急ぎで駆け出しました。

執務室の前には衛兵が何人も立っていて、王の部屋を守っていました。ゾとヨが近づいていくと、こら、あっちへいけ！ と追い払われてしまします。ゾとヨがキィキィと猿の声で抗議しますが、どうしても中に入れてもらえせん。

すると、そこへキースが派手な恰好の道化と一緒にやってきました。「ゾ、ヨ、どうしたんだ、こんなところで？」
とキースが驚きます。

道化は衛兵たちへ大きく体を曲げて、滑稽な道化のお辞儀をしました。流れるような口上を始めます。

「これはこれは陛下の信頼厚い親衛隊の皆様方、お暑い日々が続く中、毎日お仕事ご苦労さまでございます。私めトウガリ、先ほど裏庭を歩いておりましたところ、このお客さまが迷子になっているのを発見いたしました。お客さまを陛下に送り届けにまいりましたので、なにとぞ陛下にお取り次ぎ願えますでしょうか」

衛兵たちは疑うこともなくその話を聞き、すぐに室内の王へ伺いを立てました。

「陛下がお会いになるそうだ。中へ入れ」

とキースとトウガリを執務室に入れてくれます。ゾとヨも、キースの肩にしがみついて、ちゃっかり中に入りました。

室内にはロムド王とリーンス宰相と警備兵がいました。

「我々がロムドの太陽である偉大な国王陛下。本日もご機嫌麗しいご様子、我々臣下の心は喜びにうち震えております」

とトウガリがまた口上を述べる間に、宰相が警備兵を部屋から下がらせません。

部屋から兵がいなくなったとたん、トウガリはがらりと口調を変えました。

「陛下、一大事です。サータマンの魔法使いのイール・ダリが脱獄しました」

脱獄！？ と驚く王と宰相に、キースも言いました。

「厨房のまかないたちの話が気になったので、トウガリと二人で牢を確かめに行っただんです。牢の中に魔法使いはいました。ところが、それは闇の魔法でイール・ダリの姿に変えられた豚だったんです。ぼくが解除の魔法を使ったら、すぐに元の姿に戻りました」

「イール・ダリの行方はわかりません。奴は闇魔法を使うし、自分を打ち負かしたこのロムドを憎んでいるので、非常に危険です。大変失礼でしたが、急ぎ陛下にお知らせに上がりました」

とトウガリが話し続けます。

王は真剣な顔になりました。

「ユギルの留守の隙を突かれたか……。奴がどこへ行ったか、足取りはつかめんのか？」

「脱獄したのは三日ほど前のことのようにです。これから足取りは追いますが、すでにこの王都を離れている可能性が」

トウガリがそこまで話したとき、キースの肩の上から猿たちが急に口をはさみました。

「その魔法使いつて、もしかして、黒髪で黒い口ひげを生やした男かヨ？」

「それなら、オレたち、さつき廊下で見かけたゾ。オレたちの目の前で、姿を消していったゾ」

なんだって！？ と一同は驚きました。

「奴はまだこの城にいるのか……。いったい何が目的なのだ？」

と王は言いましたが、とっさにそれに答えられる者はありませんでした。

「あいつが脱獄？」

執務室からの連絡を受けて、南の塔の白の魔法使いは眉をひそめました。

彼女と闇魔法使いのイール・ダリとは、四ヶ月あまり前の王都攻防戦の際に、この南の塔で対決していました。傲慢な男で、彼女を闇の首輪で奴隷にしようとし、それがかなわないとわかると、闇の石の杖で殺そうとしたのです。闇の石さえなければ、恐れるほどの敵ではないのですが、それだけに疑問が湧いてきます。

「どうやって脱獄したのだろう？ 魔法使い専用の特殊な牢に入れられていたというのに」

部下の魔法使いたちに城内を探らせますが、誰も闇の魔法使いを発見することはできませんでした。彼女自身の透視力でも、イール・ダリは見つけられません。けれども、奴はこの城内にいるというのです……。

少し考えてから、白の魔法使いはまたつぶやきました。
「アリアンに探してもらおう。どうも気になる」

ところが、彼女がアリアンの部屋へ飛ぶより先に、そのアリアンが入口から駆け込んできました。塔の螺旋階段を駆け上がったので、長い黒髪を吹き乱し、顔を真っ赤にして息を切らしています。鷹のグリーも一緒に飛び込んできます。

驚く白の魔法使いに、アリアンが叫びました。

「気をつけて！ 敵がこちらに！」

言い終わらないうちに、黒い髪と口ひげの中年男が姿を現しました。

黒いシャツとズボンを着て、まるで闇の民のような恰好をしています。

「イール・ダリ！」

と白の魔法使いは声を上げ、男が手に持っているものを見て、ぎょっとしました。先端に黒い石をはめ込んだ金属の杖です。

「闇の石だ！？ 馬鹿な！」

と女神官は思わず叫びました。闇の石は、赤いドワーフの戦いの際にデビルドラゴンの元へ飛んで行って、消滅したはずですが。

すると、イール・ダリが、にやりと笑いました。

「驚いたか、女。サータマン本国には、まだひとつだけ闇の石が残っていたんだよ。先の闇の石よりはずっと小さいが、それを闇のドワーフがもう一本の杖に仕立てていて、サータマン王が密かにそれを俺の元まで届けてくれたんだ」

白の魔法使いは歯ぎしりしました。どうりで敗戦国のはずのサータマンが、なかなか交渉に臨まなかったはずだ、と考えます。サータマン王には、闇の石の杖を使って魔法使いを取り戻し、巻き返しを図る勝算があったのです。

同時に、イール・ダリが綿密な準備をしてやってきたことにも気がつきました。ロムド城には今、青と深緑の二人の魔法使いが欠けています。四大魔法使いの戦力を分散させるために、東の街道に怪物の牛鬼きゅうまを出現させたのに違いありません。

白の魔法使いは急いで赤の魔法使いを呼ぼうとしましたが、見えぬ壁にさえぎられて、心話が届かなくなっていました。南の塔の最上階は、すでに闇の石の支配下に入っていたのです。

白の魔法使いはトネリコの杖を構えると、部屋の隅で立ちすくんでいるアリアンへ言いました。

「後ろへ来い！ 早く！」

アリアンとグーリーが女神官の後ろへ駆け込むのと、イール・ダリが闇の杖から魔法を撃ち出すのが同時でした。トネリコの杖が発した白い光が、壁のように広がって闇魔法を防ぎます。

「甘い！ これは闇の杖だぞ。それしきの光の魔法で対抗できるものか！」

とイール・ダリがまた襲いかかってきました。今度は闇の杖で直接殴りかかってきます。白の魔法使いは自分の杖でそれを受け止めました。杖と杖がぶつかり合って、黒と白の光の火花を散らします。力負けしたのは、白の魔法使いのほうでした。黒い光に押されて後ろへ跳ね飛ばされます。

「白さん！！」

アリアンはとっさに腕を広げました。後ろの壁と自分の体で女神官を受け止めます。

「無理なことをするな！ 怪我をするぞ！」

と白の魔法使いはアリアンを叱りました。少女まで一緒に壁にたたきつけてしまったからです。

すると、イール・ダリがアリアンへ目を向けました。じろじろと眺めてから、ほう、と笑います。

「これは綺麗な娘だな。ロムド城にこんな美しい娘がいたとは知らなかった。サータマン王への手土産にいただいでいくとするか」

とまた闇の杖を振り下ろし、杖で受け止めた白の魔法使いを横へ吹き飛ばしてしまいます。

女神官はとっさに床に手をつくると、体を反転させて着地しました。杖から魔法を撃ち出して、逆にイール・ダリを跳ね飛ばし、アリアンへ言います。

「外へ逃げろ！ 助けを呼ぶんだ！」

アリアンは弾かれたように駆け出しました。出口から飛び出して助けを求めようとしますが、見えない力に行く手をさえぎられて、外に

出ることができません。闇の杖の魔法が、入口もふさいでいたのです。鷹のグーリーが、見えない壁を翼でたいて、キエエ、と鳴きます。

女神官は舌打ちしました。もっと強力な魔法で敵を打ちのめすことも可能なのですが、この状態ではアリアンたちまで巻き込んでしまうので、強い魔法は使えません。起き上がってきた男をまた杖で跳ね飛ばし、出口へ走って障壁を消そうとします。

すると、イール・ダリが床から顔を上げて笑いました。

「離れたな、女。俺の本当の目的はこれだ！」

闇の杖が、部屋の中央の台座に据えられた護具を狙っていました。これが壊されれば、ロムド城の守りはほころび、敵の侵入を許してしまいます。白の魔法使いはとっさにまた駆け出し、男と護具の間に割って入って、闇の魔法を体で受け止めました。そのまま大きく跳ね飛ばされて床に倒れます。

男が飛び起きました。杖を振り上げて、闇の石で女神官を打ちのめそうとします。杖の先には闇の石があります。触れただけで生き物を怪物に変える、恐ろしい魔石です。

そこへ、ばさばさと音を立てて鷹が飛び込んできました。イール・ダリに襲いかかります。

「邪魔だ！」

と男は闇の杖で鷹を打ちました。鳥が床に落ち、みるみる怪物に変わっていきます。前半分がワシ、後ろ半分がライオンの、黒いグリフィンです。

ほう、と男はまた笑うと、目の前に現れた巨大な魔獣へ命令しました。

「その女を引き裂け、グリフィン！ ずたずたにして、骨も残さず食い尽くしてやれ！」

ギエエエ

グリフィンが高く鳴くと、ワシの前脚を持ち上げました。鋭い爪とくちばしで襲いかかっていた相手は、女神官ではなく、イール・ダリのほうです。男が驚いて後ずさりします。

「アリアンが出口の前から叫びました。」

「その男を倒すのよ、グーリー！ 白さんと護具を守って！」

グリフィンがまたイール・ダリに襲いかかります。

闇の杖でそれを追い払って、男はどなりました。

「貴様のしわざか、娘！ 魔獣使いだったのか！」

走り寄ってアリアンの顔を拳で殴ったので、アリアンが悲鳴を上げて倒れます。

「ギエーン！」

また飛びかかろうとしたグーリーが、闇の魔法で跳ね飛ばされます。

男は闇の杖を空中で回転させて、黒い剣に変えました。柄の先に闇の石がはめ込まれた闇の剣です。

「死ね、魔獣使い！」

と剣をアリアンへ振り下ろします。

そこへ、開いた出口の真ん中から、いきなり細身の剣が現れました。アリアンの上で闇の剣を受け止め、強く弾き返します。

なに！？ とイール・ダリは驚きました。出口の向こうへ目を凝らしますが、剣の刀身が突き出ているだけで、人の姿は見えません。

すると細身の剣が動き出しました。何かを切り裂くように下へ進み、剣の先が床に着くと刀身が引っ込んで、そこから人が現れます。白い服に青いマントをまとった、黒髪の青年です。カーテンを押し開けるように両手を広げ、右手には細身の剣を握っています。

青年は床に倒れたアリアンを見つめ、腫れ上がった頬に痛ましそうに目を細めると、優しい声で言いました。

「ちよっと待っているんだ。これがすんだら、すぐに治してあげるか

らね」

「貴様は何者だ！？ それは普通の剣だろう！ それでどうして闇の障壁が切り裂けるんだ！？」

とイール・ダリがわめくと、青年はそちらへ目を向けました。端正な顔が、ぎよっとするほど冷やかな表情に変わります。

「これくらい、ぼくには簡単なことだ。その程度の闇の力で威張るな、ひよっこ魔法使い」

声は静かなのに、その奥に言いしれない迫力がありました。青い瞳にも、危険な光がちらちらしています。

けれども、馬鹿にされて逆上したイール・ダリは、それに気づくことができませんでした。杖が変わった剣を構えてどなりま

「生意気を言う若造め！ この杖を手にした俺の力を見せてやる！ 身をもって思い知れ！」

闇の剣が振り下ろされてきました。青年が自分の剣で受け止めようとします。

ところが、闇の剣は一瞬でまた闇の杖に戻りました。イール・ダリが杖を引き、すぐにまた突き出します。杖の先端の闇の石が、青年の腹にめり込み、青年がうめいて前かがみになります。

「見たか！」

とイール・ダリは勝ち誇って言いました。

「これで貴様は怪物だ！ 一生闇を這いずって、墓場の死体を食べている！」

すると、青年が闇の杖をつかみました。その指先に長い爪が伸びていきます。さらに頭には二本のねじれ角が、背中には黒い翼が現れて、怪物に変わります。

青年は顔を上げました。その瞳も血の色です。

「嫌だね。ぼくはもう闇には戻らないと誓ったんだ」

と言つて歪めるように笑つた口元から、鋭い牙のぞきまゝ。
イル・ダリはいぶかしい顔になりました。闇の石で怪物になつたにしては様子が変だ、と考えたのです。急いで杖を引き戻そうとしますが、青年は杖をつかんだまま放しません。

「なんだ、こんなちつぽけな闇の石」
と言つて、青年がまた笑います。

イル・ダリは仰天しました。青年が無造作に握つた杖の先で、闇の石が溶け出していました。吸い込まれるように見えなくなりまゝ。

「ど　どこへやつた!?　石を返せ!　あれは俺のものだぞ!」
またわめいてつかみかかつてきたイル・ダリを、青年は逆につかみ返しました。

「どこにもやつていないさ。ほら、ここにある」

とたんに、イル・ダリは悲鳴を上げて全身を引きつらせました。髪の毛もひげも一本残らず逆立ち、口から泡を吐き始めます。その体が黒く変わり、やがて溶けて流れ出しました。人の形を取れなくなり、崩れて床の上に落ちます。

男は、ひとかたまりの泥のような「おどろ」になっていました。

7

おどろに変わったイル・ダリを眺めて、キースは肩をすくめました。

「君の望み通り、闇の石を返してあげたよ。闇と契約を結んで力を得た人間は、限界を超える闇を流し込まれると、おどろになるんだ。本物の闇は人間の手におえるような代物じゃない。闇になんて手を出さ

ないほうが賢明なのさ」

おどろになったイル・ダリが、足元で何か言いたげにうごめきましたが、それはもう声にはなりません。

キースは白の魔法使いを振り向きまゝした。

「こいつはもう人には戻れない。こいつを消してやってくれ」

女神官は一部始終を驚いて眺めていましたが、そう言われて立ち上がりまゝした。闇魔法にたたくつけられた怪我は、自分自身で癒してました。トネリコの杖をおどろに向け、ためらいもなく言います。

「ユリスナイの名の下に命じる。闇に染まりし魂よ、消滅せよ!」
白い輝きが杖からほとばしって、おどろを消し去ります。

すると、出口の向こうに急に人々が現れました。ハシバミの杖を持った赤の魔法使い、道化の恰好のトウガリ、剣を握つたオリバンとセシル、小猿のゾとヨ、ロムド王とリーンス宰相の姿もあります。闇の石が作る障壁が消えたので、南の塔の最上階が元の世界にまたつながつたのです。

「大丈夫か、おまえたち!？」

「シロ、ジ、カ？」

とオリバンとセシルと赤の魔法使いが飛び込んできます。

続いて部屋に入ってきたトウガリが、闇の民の姿のキースを見て、ちよつと笑いました。

「外から見えていたぞ。闇には闇が効くものだな。毒をもって毒を制するといふやつか」

「人を毒にするなよ」

とキースは口を尖らせると、床の上からアリアンを抱き起こししました。頬の傷を消しながら言います。

「君は、見た目に寄らず、本当に勇敢だな……。でも、頼むから、こういうときにはまず、ぼくたちを助けに呼んでくれよ。白の魔法使い

にイール・ダリの脱獄を知らせようとしたら、返事がなかったから、奴がここにいるとわかったけれど、まさか君まで一緒にいるとは思わなかったからね。部屋に君の姿が見えたときには、寿命が縮んだよ」
アリアンは顔を赤らめると、ごめんなさい、と謝りました。青年が意外なほど真剣な顔をしていたからです。本当に彼女を心配してくれたのだとわかります……。

ゾとヨが部屋に入ってきて、イール・ダリが消えたあたりをおっかなびつくり眺めました。

「も、もう大丈夫かヨ？」

「おどろは怖いゾ。本当に消えたか、心配だゾ」

「大丈夫。もう闇は感じられないからな」

とキースは言って、また人間の姿に戻りました。白い服に青いマントの聖騎士団の恰好です。アリアンもその隣に立ち上がります。こちらには若草色のドレス姿です。鷹に戻ったグリーがキースの肩に舞い下ります。

最後に部屋に入ってきたロムド王が、彼らに言いました。

「よくぞ戦ってくれたな、キース、アリアン、グリー。ユギルが不在の際を敵に突かれたが、おかげで城は守られた。感謝する」

すると、小猿のゾとヨが騒ぎ出しました。

「オレたちは？ オレたちは？」

「オレたちだっけ働いたゾ！ 闇の魔法使いを王様に教えたゾ！」

「むろん、そなたたちも活躍した。本当に感謝しているぞ」

ロムド王は冠をつけた頭を、ためらいもなくキースやゴブリンたちへ下げました。ゾとヨが歓声を上げて飛び跳ねます。

「やったゾ！ オレたち、ちゃんと王様の役に立てたゾ！」

「オレたち、これで王様のトモダチかヨ！？」

ロムド王は笑ってうなずきました。

「ああ。そなたたちは立派なロムドの友だ。我らと共に光を守ってくれる、すばらしい戦士たちであるな」

そのことばにキースとアリアンも嬉しそうに顔を赤らめ、グリーは翼を広げて、キアア、と満足げに鳴きました。

王は一同に呼びかけました。

「来なさい、皆の者。急ごしらえになるが、光を守るためにやってきた闇の友の、歓迎の宴といこう」

宰相が心得て、厨房に宴会の指示を出しに駆け出し、オリバンやセシル、トウガリや魔法使いたちは笑ってうなずきました。

キース、アリアン、グリー、ゾとヨ。

闇の国を捨てた闇の一行は、フルートたちによって引き合わされた人々と、南の塔を下りていきました。

(2010年3月5日)